

つながりを 煽られる 子どもたち

ネット依存といじめ問題を考える

土井 隆義

メビウスの輪のように
リアルとネットが
地続きの世界を生きる
時代の申し子たち…



わかる、使えるくはじめの1冊>
岩波ブックレット

定価(本体620円+税)

つながりを 煽られる 子どもたち

ネット依存といじめ問題を考える

土井 隆義

第1章

メビウスの輪の翳り^{かげ}.....

2

つながり過剰症候群／多様化する価値観／人間関係の自由化／自由な関係の二面性／疎外された人間関係／関係不安からの依存

第2章

つながりの格差化.....

22

豊かさから美味しさへ／新自由主義とリスク化／コミュニケーション能力／インフラとしての友だち／一匹狼から一人ぼっちへ／「つながり力」専制の時代

第3章

「いいね！」の承認願望.....

42

暴走するつながり意識／SNSでの自己承認／羅針盤としての友だち／世代間ギャップの縮小／承認の耐えられない軽さ／無極化する教室

第4章

常時接続を超えて.....

62

肥大する承認願望／イッメンという世間／人間関係の視野角度／キャラの機能／予定調和の落とし穴／匿名化された人間関係／代替不安からの逃避／つながりの質的転換へ

土井隆義

1960年、山口県に生まれる。筑波大学人文社会系教授、社会学、大阪大学大学院人間科学研究科博士課程中退、博士(人間科学)。
著書に『「個性」を煽られる子どもたち——親密圏の変容を考える』、『キャラ化する／される子どもたち——排除型社会における新たな人間像』(以上、岩波ブックレット、2004年、2009年)、『少年犯罪〈減少〉のパラドクス』(シリーズ「若者の気分」、岩波書店、2012年)、『人間失格? ——「罪」を犯した少年と社会をつなぐ』(シリーズ「どう考える? ニッポンの教育問題」、日本図書センター、2010年)、『友だち地獄——「空気を読む」世代のサバイバル』(ちくま新書、2008年)、『〈非行少年〉の消滅——個性神話と少年犯罪』(信山社、2003年)など。

つながりを煽られる子どもたち
——ネット依存といじめ問題を考える

岩波ブックレット 903

2014年6月20日 第1刷発行

著者 どい たかよし
土井隆義

発行者 岡本 厚

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111

ブックレット編集部 03-5210-4069

<http://www.iwanami.co.jp/hensyu/booklet/>

印刷・製本 法令印刷 装丁 副田高行 表紙イラスト 藤原ヒロコ

© Takayoshi Doi 2014
ISBN 978-4-00-270903-1

Printed in Japan

つながりを 煽られる 子どもたち

ネット依存といじめ問題を考える

土井 隆義

第1章

メビウスの輪の翳り^{かげ}.....

2

つながり過剰症候群／多様化する価値観／人間関係の自由化／自由な関係の二面性／疎外された人間関係／関係不安からの依存

第2章

つながりの格差化.....

22

豊かさから美味しさへ／新自由主義とリスク化／コミュニケーション能力／インフラとしての友だち／一匹狼から一人ぼっちへ／「つながり力」専制の時代

第3章

「いいね！」の承認願望.....

42

暴走するつながり意識／SNSでの自己承認／羅針盤としての友だち／世代間ギャップの縮小／承認の耐えられない軽さ／無極化する教室

第4章

常時接続を超えて.....

62

肥大する承認願望／イッメンという世間／人間関係の視野角度／キャラの機能／予定調和の落とし穴／匿名化された人間関係／代替不安からの逃避／つながりの質的転換へ

つながりを 煽られる 子どもたち

ネット依存といじめ問題を考える

土井 隆義

第1章

メビウスの輪の罫り^{かけ}.....

2

つながり過剰症候群／多様化する価値観／人間関係の自由化／自由な関係の二面性／疎外された人間関係／関係不安からの依存

第2章

つながりの格差化.....

22

豊かさから美味しさへ／新自由主義とリスク化／コミュニケーション能力／インフラとしての友だち／一匹狼から一人ぼっちへ／「つながり力」専制の時代

第3章

「いいね！」の承認願望.....

42

暴走するつながり意識／SNSでの自己承認／羅針盤としての友だち／世代間ギャップの縮小／承認の耐えられない軽さ／無極化する教室

第4章

常時接続を超えて.....

62

肥大する承認願望／イッメンという世間／人間関係の視野角度／キャラの機能／予定調和の落とし穴／匿名化された人間関係／代替不安からの逃避／つながりの質的転換へ

第1章 メビウスの輪の翳^{かげ}り

つながり過剰症候群

昨今の子どもたちにとって、ケータイ(携帯電話)やスマホ(スマートフォン)などのモバイル機器は、友だちとの人間関係を円滑に維持していくために必須のツールとなっています。高校生はもちろんですが、いまや中学生や小学生でも、それらの機器を駆使している子どもたちが多く見られます。なかにはパソコンも器用に使いこなし、大人顔負けの関係マネージメントを行なっている者もいるようです。これらのインターネット接続機器がないと、現在では日常の人間関係を維持することすら難しくなっているのです。

人間関係のマネージメント・ツールとして、日本の子どもたちが最初に手に入れたモバイル機器は、おそらく一九九〇年代に流行したポケベル(ポケットベル)でしょう。その後、ピッチ(PHS)からケータイへと、その主役は移り変わってきました。それでもまだ当時は、音声通話がメール機能に取って代わられた程度でした。しかし、さらにその後、ネットへの接続が一般的になるにつれ、ブログや掲示板、チャットなどが新しいコミュニケーション・ツールとして普及してきます。そして今では、スマホが一気に普及したことにより、たとえばLINEのようなアプリ(アプリケーション・ソフトウェア)による二四時間の常時接続もごく普通のことになりました。

今日の子どもたちは、これらのネット機器を介して、互いの息づかいをつねに確認しあっています。メールが主流だった頃にも、いわゆる「三〇分ルール」のように、できるだけ短時間で返事を出すのがマナーと一部ではいわれたりしました。しかし、それでも当時のメッセージのやり取りには、音声通話とは違ってまだ時間的なズレがかなりあり、基本的に非同期のコミュニケーションといえました。

ところが、LINEのようなスマホのアプリでは、ごく簡単な操作で自分のメッセージをただちに相手へ届けられ、しかも相手がそれを読んだかどうかとも即座に確認することができます。そのため、「三〇分以内に」などと悠長なことはいってられないほど同期性が増し、音声通話とはほぼ同じリアルタイムでのコミュニケーションが、しかし音声通話とは違って時間と場所をまったく気にせずに繰り広げられるようになりました。

このようなモバイル機器の飛躍的な技術革新も相まって、昨今の子どもたちの間では、人間関係の常時接続化が急速に進んでいます。その結果、ネット依存と呼ばれる現象が大きな社会問題として浮上してきました。厚生労働省の補助金を受けた研究グループ（代表・大井田隆日本大学教授）が二〇一三年に行なった調査の推計によると、現在、ネットへの依存度が高い中高生は全国に約五二万人いるそうです。その六割には睡眠の質に問題があり、また二割には寝つきの悪い傾向も見受けられたと報告されています。

もちろん、ネット依存の原因は人間関係の常時接続化だけではありません。一口に依存といってもその様態はいろいろで、コミュニケーション・アプリを介した他者との交流にのめり込む者がい

る一方で、オンラインゲームや動画など多彩なコンテンツの魅力にはまり込む場合もあります。前者のつながり依存と後者のコンテンツ依存とは、その背景が異なっていますから、対処法もまた違ったものになるでしょう。しかし、後ほど詳しく述べますが、昨今の子どもたちが陥りがちなのは、圧倒的に前者のつながり依存なのです。

また、近年の学校では、生徒どうしの関係トラブルも目立つようになっていきます。かつて学校での関係トラブルといえば、一九八〇年代に「校内暴力」という言葉が一世を風靡ふうびしたように、教師と生徒の間で起こるものが定番でした。ところが、組織的な対教師暴力はいまやほとんど見られなくなり、それと入れ替わるように生徒間暴力がクローズアップされるようになりました。いじめがその典型で、被害を苦にした自殺者も出るほど深刻化しています。

しかも、今日のいじめ問題では、殴る蹴るといった肉体的な暴力よりも、いやがらせや暴言などの精神的な暴力のほうが目立つようになっていきます。そのため、いじめの舞台も学校空間に限定されることなく、ネット空間へと広がってきました。いわゆる「ネットいじめ」と呼ばれるのですが、その被害に遭うのを避けるために気を遣って常時接続を止められず、仕方なくネット依存に陥ってしまう子どもたちも見られるほどです。

いじめは人間集団に普遍的な現象という人もいます。しかし、今日のいじめには従来とは違った特徴があります。こちら後ほど詳しく述べますが、それもまたつながり依存から派生しているのです。ネット依存がつながり依存から生じているというのなら、どちらも嗜癖しへきの問題ですから、おそらく誰でも理解しやすいでしょう。しかし、いじめ問題がつながり依存から生じているといわれ

でも、少し分かりづらいかもしれません。いじめとはつながりを断ち切ってしまう行為だと一般にはみなされているからです。

つながり依存といじめは、たしかに表面上は相反する現象のように見えます。しかし、人間関係への強いこだわりが背後に潜んでいる点で、じつはネット依存と同根の現象なのです。今日のいじめは、人間関係を破壊するものではなく、むしろそれを維持する手段となっているからです。そこでこの小冊子では、つながり依存から派生しているこれらの諸問題を「つながり過剰症候群」と捉え、そこへ至る社会背景と心理メカニズムについて考えてみたいと思います。

多様化する価値観

ネット依存もいじめ問題も、早急に対処しなければならない由々しき現象です。しかし、ものごととは冷静な目で見つめなければなりません。NHK放送文化研究所が一九八二年から五年おきに実施している「中学生・高校生の生活と意識調査」によれば、学校を楽しいと感じる中高生はほぼコンスタントに増えつづけており、最新の二〇一二年調査では、中学生と高校生のどちらも九五%を超えています。

気になるのはその理由ですが、中学生の約七割、高校生の約八割が、友だちと話したり一緒に何かしたりすることがいちばん楽しいと答え、部活動などの二位以下を大きく引き離しています。同様の傾向は、一九七〇年代の初頭から同研究所が継続して行ってきた「日本人の意識調査」でもうかがえます。人間関係に満足していると回答した人の割合は、高年齢層では現在までほとんど変

化がないのに対し、若年層では二〇〇〇年を越えたあたりから大幅に上昇しているのです。

また、内閣府が行なっている「世界青年意識調査」で日本のデータを眺めても、まったく同様の傾向がうかがえます。友人や仲間といるときに充実感を覚えると回答した一八歳から二四歳の若者は、一九七〇年代にはまだ半数程度だったのですが、一九九〇年代後半からはずっと七〇%台を保っています。では、人間関係に対する彼らの満足度が上昇してきたのはなぜでしょうか。

以前を振り返ってみると、同じ地域の住民だから、同じ親族の一員だから、同じ会社の社員だからといったように、社会的な枠組みに同じく属することが人間関係を支える強力な基盤となっていました。逆にいえば、当時の人間関係は、その多くが社会的な制度に強く縛られていました。子どもたちの世界においても同様で、たとえば同じ学校やクラスの生徒になった以上は仲間でなければならないとか、同じ部活のメンバーである以上は助けあわなければならないとか、そういった規範的な圧力が少なからずありました。

しかし、日本社会が成熟期を迎えるとともに、私たちは旧来の制度や規範へのこだわりを弱め、それらに縛られない自由で多様な価値観を持つようになります。右で触れた「日本人の意識調査」によれば、日本人の価値観は一九七〇年代から徐々に多様化しています。様々な質問項目を総合的に解析し、「林の数量化三類」という統計手法を使って共通の傾向を探っていくと、「伝統志向」から「伝統離脱」へとシフトしていることが分かります。図1-1が示すように、とくにその傾向を推し進めているのは若い世代です。

いきなり話は変わりますが、芸能プロデューサーの秋元康さんが仕掛けたAKB48は、いまや日

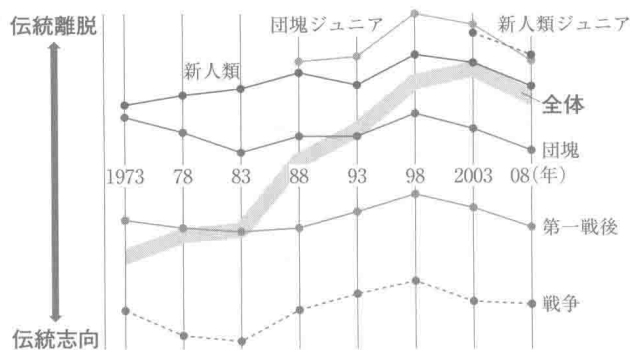


図 1-1 日本人の価値意識の変化

(NHK 放送文化研究所「日本人の意識調査」から作成)

本の芸能界で押しも押されもしない最強の人気グループでしょう。毎年六月に行なわれる彼女たちの総選挙は、すでに初夏の風物詩となった観すらあります。従来からあったタレントの人気投票とは違って、この選挙では獲得票数で次回発売のシングルCDの選抜メンバーと、そのポジションが決まります。AKBの面々にとってはまさにアイドル生命をかけた真剣勝負です。

しかし、AKBが話題になりはじめた当初は、秋元さんが自らの眼力だけで、選抜メンバーのすべてを決めていました。秋元さんは、以前にもアイドル・グループの「おニヤ子クラブ」を大ヒットさせ、その後は名プロデューサーとして芸能界に不動の地位を築いた人物です。その彼が、業界のプロフェッショナルとしての視点から、タレントたちの様々な魅力を総合的に評価して、選抜メンバーを決めていたのです。

ところが、やがてその決定に対して、「なぜ、あの子が入って、この子が入らないのか？」とファンたちからクレームが多く寄せられるようになります。ファンたちの評価のまなざしはあまりに多種多様で、業界のプロフェッショナルといえども、それらのすべてを汲みとることは不可能になっていったのです。しかし、そこはさすがに名プロデューサーです。批判の大合唱に逆に商機を嗅ぎ取った秋元さんは、ファンた

ちがメンバーを自ら選抜できる投票券をつけたCDを売り出し、新たなビジネスとして成功させてしまいました。

この経緯を振り返ってみると、AKB総選挙の大ヒットは、今日の若者たちの価値観の多様化を物語っているといえます。秋元さんのような名プロデューサーといえども、ファンの趣向を一括して捉えられないほど、若者たちの価値観は多様化しているのです。かつて評価の序列性が明確に存在していた頃とは違って、今日では多様な評価基準がいずれも等価に併存するようになっていきます。いまや専門家の判断ですら、その並列化した選択肢の一つにすぎず、素人の判断より優位性を保っているとは感じられなくなっているのです。

人間関係の自由化

このような価値観の多様化は、人間関係の築かれ方にも影響を与えます。端的に言えば、その自由化とフラット化を推し進めるのです。AKBのファンたちも、芸能界で名をはせるプロデューサーの決定だからといって、それに納得などせずに、大ブーイングを繰り広げたのでした。彼らは、アイドルとの関係もフラットだと感じています。だから彼らは、アイドルを「追っかける」とは表現せずに、「押す」と表現するのです。お気に入りのタレントを自分たちの票の力で人気者にしようといった感覚なのでしょう。

タレントの側もそれは同じです。かつてのタレントたちは、よほどの人気者でもないかぎり、アイドルとは自称しませんでした。アイドルとはファンたちに仰ぎ見られるものという感覚があった

からです。しかし今日では、まだ駆け出しのタレントでも、臆することなくアイドルをやっていると自称します。この「やっている」という表現が示すように、ファンとの関係は基本的にフラットな役割分担にすぎないと感じるようになっていっています。

さて、話を戻しましょう。このような人間関係の変化は、一般の日常生活にも当てはまります。今日では、たとえば地縁や血縁などの伝統的な共同体も、あるいは学校や職場のような社会的な団体も、かつて有していた強い拘束力を徐々に弱めてきました。また、友だちのような自発的に作り上げられる関係も、その自由度をさらに高めてきました。

もちろん現在でも、友だちになる最初のきっかけは、たまたま近所に住んでいたとか、クラスが一緒だったとか、かつてと大して違っていません。しかし、その後の関係を維持していく上で、制度的な基盤が果たす役割は大幅に小さくなっています。同じクラスの生徒だからといって、自分と気の合わない相手と無理をして付きあう必要などないし、同じ部活の一員だからといって、無理をして助けあう必要もない。制度的な枠組みの拘束力が弱まっていくなかで、そう考える子どもたちが増えています。

また、近年のネット環境の発達には、その傾向にさらに拍車をかけています。とりわけモバイル機器の発達は、子どもたちの人間関係に大きな変化をもたらしました。いまではクラスや部活にとらわれない複層的な人間関係が、学校のなかで同時に築かれるようになっていきます。たとえば、各自の趣味趣向に応じて、気の合う仲間ごとにグループを使い分け、それらの関係を同時並行で進めることも簡単になりました。学校ではほとんど口をきかない生徒どうしが、LINEのグループ内で

は密接につながっていたりもします。

ネットを介して作られる人間関係は可視性が低く、学校の教師や親たちからほとんど見えません。しかし、だからこそ、子どもたちがまったく自由に人間関係を築ける場が、それこそ飛躍的に拡大してきたのだともいえます。このように、今日の子どもの間では、人間関係の自由化とネット環境の発達が相まって、既存の制度や組織に縛られない人間関係づくりが広がってきました。不本意な相手との関係へ無理矢理に縛られることが減ったのですから、人間関係への満足度が上昇してくるのも当然の結果といえるでしょう。

自由な関係の二面性

つねに誰かとつながっていたいという子どもたちの欲求が、今日のネット環境の普及によって満たされやすくなったのは事実です。ネットのおかげで、いまや私たちは、いつでもどこに居ても、つながりたい相手と即座に接続することが容易になりました。しかし、いつでも誰かとつながれる環境が用意された結果、皮肉にも一人でいるときの孤立感は逆に強まっています。いつでも連絡がとれるはずなのに誰からも反応がないとすれば、それは人間的な魅力が自分にないたためかもしれない。そう感じるようになったのです。

このように、近年のネット環境が人間関係の常時接続化を煽^{あお}っている側面は、たしかに否定できません。しかし、つながり依存が強まっている理由はそれだけではないはずです。そもそも、これだけモバイル機器が急速に進化したのも、現代の人びとが、とりわけ若者や子どもたちが、人間関

係の常時接続化を追い求めてきた結果といえるからです。

たとえば、ケータイが普及する直前に若者たちの間で大流行したポケベルも、その当初は、営業等で出先にいるビジネスマン向けの簡単な呼び出し装置にすぎませんでした。そこへ、またたく間に多彩な文字や記号の表示機能が搭載されるようになったのは、プロバイダーによるマーケット・リサーチによって、もっと濃密で多彩なコミュニケーションをとりたいという当時の高校生たちの切実なニーズを汲みとった製品開発の賜物でした。

では、今日の若者たちが、とりわけ学齢期の子どもたちが、それほど過度のつながり依存を示すようになっているのはなぜでしょうか。つねに誰かとつながっていなければ安心できず、一人でいる人間には価値がないかのように考えてしまう心理には、どのような背景があるのでしょうか。

森永製菓株式会社が二〇一一年に行なった興味深い調査があります。それによると、女子中高生の八四％が、日常的に疲れやストレスを感じていると回答しています。他方、三〇～五〇代のサラリーマンでは、八〇％がそう回答しています。平たくいえば、世のお父さんたちよりその娘さんたちのほうが、疲れやストレスを感じている人が多いことになります。しかも、中学生と高校生を比較すると、わずかな差ではあるものの、中学生のほうがより強いストレスにさらされているようです。

問題はその疲れやストレスを感じる対象ですが、女子中高生でもっとも多いのは同級生との人間関係で、勉強を凌ぐ多さとなっています。一方、先輩や後輩との人間関係に対しては、さほど疲れやストレスを感じていません。いわばタテの人間関係よりもヨコの人間関係のほうが、はるかに大

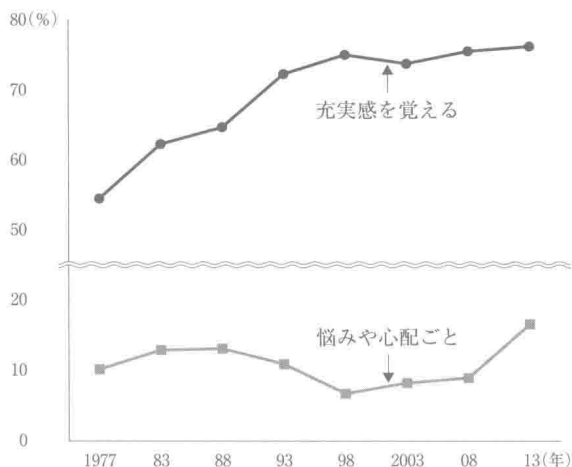


図 1-2 友人や仲間のこと (18~24 歳)

(内閣府「世界青年意識調査」から作成)

※2013 年の数値は調査方法の変更にもなう補正値

実測値は「充実感」約 79%、「悩み・心配事」約 45%

人はある時期まで減っていました。人間関係への満足度が上昇してきたのですから、それは当然のことでしょう。おそらく不満を感じる人が減ってきたのです。ところが、二〇〇〇年代に入るとその傾向が反転します。友人や仲間に悩みや心配を感じる人が再び増えはじめるのです。

同じような現象は、同調査で家族関係について尋ねた設問でも見受けられます。家族といえるときに充実感を覚えると答えた人は、一九七〇年代には約二〇%でしたが、二〇〇〇年代には約四〇%に増えています。しかし、それと同時に、家族のことが悩みや心配と感じる人の割合も、一九九〇

きなストレス源となっているのです。ちなみに家庭での人間関係については両者の中間くらいですが、それは後述するように、親子関係が従来のタテの関係からヨコの関係へと徐々に近づいてきたからです。

また、最新調査では私も設計と分析に加わった内閣府の「世界青年意識調査」では、友人や仲間との関係について、その充実感とともに、悩みや心配ごとの対象となっているかどうかも尋ねています。その結果をみると、図 1-2 が示すように、充実感を覚える人が増えるにつれて、そこに悩みや心配を感じる

年代までは減少していたのに、二〇〇〇年代に入ると再び増加へと転じているのです。これは、いったいなぜでしょうか。

この調査では「悩みや心配ごと」としか尋ねていないので、その中身までは分かりません。しかし、友人や家族との関係に不満を覚える人が増えたのではないことは確かでしょう。充実感はずっと上昇しつづけているからです。では、反転して増えはじめた「悩みや心配ごと」とは具体的に何でしょうか。それは、おそらく不安ではないでしょうか。そう解釈すると、表面上は充実感の上昇と相反する現象のように見えて、じつは互いに矛盾するものではないことが見えてきます。

制度的な枠組みが人間関係をかつてのように強力に拘束しなくなったということは、裏を返せば、制度的な枠組みが人間関係を保証してくれる基盤ではなくなり、それだけ関係が不安定になってきたことを意味します。既存の制度や組織に縛られることなく、付きあう相手を勝手に選べる自由は、自分だけでなく相手も持っています。だから、その自由度の高まりは、自分が相手から選んでもらえないかもしれないリスクの高まりとセットなのです。

このように、一面では軽やかで楽しい人間関係も、他面では流動的で壊れやすい関係という顔を持っています。互いに仲良しであることの根拠は、互いにそう思っている感情の共有にしかないからです。このような状況の下では、互いの親密さをつねに確認しつづけないと、その関係を維持していくことが難しくなります。だから、満足感が上昇しながらも、また同時に不安感も募っていくのです。関係を保証してくれる安定した基盤がないので、互いに不安のスパイラルへと陥っていくやすいのです。